

多様性の世界で生きる私たち

守山南中学校一年 梅村 愛梨

あなたは、日本にいる外国人を見かけると、どう思いますか。

世の中ではグローバル化が進み、日本でも異なる文化や考え方を持つ人間が、同じ国で生活することが当たり前となってきた。

私のお母さんは外国籍だ。そのため、周りとは少し違う家庭環境であった。

学校では、時々授業参観がある。保護者同士が仲良くしている一方、日本人とは話し方や見た目が少し違っているお母さんは、多文化を理解している特定の大人たちとしか話せる相手がいなかった。そのようなことに、私は複雑な感情を抱いていた。

このような体験が、外国人に対しての差別について深く考えるきっかけとなった。

現代社会では、このような悲しい出来事が多々ある。例えば、名前が海外風だというだけで、就職活動で不利になってしまったり、地域の交流で疎外感を覚えてしまったりする人もいる。また、文化や価値観の違いから誤解が生じ、冷たい視線を向けられることもある。こうした差別や偏見で、本人の心に深い傷を負ってしまうだけでは無く、社会全体の信頼関係を失ってしまうかもしれない。

みんなが差別を無くすために、まず私たち一人ひとりが、異文化に対する理解を深める必要があると考えた。そのために、私たち日本人と外国人との、多文化交流の機会をもっと増やしていくことが大事だと思

う。そうすると、自然とお互いの文化に興味を持ち、外国人と接するときの意識や姿勢がだんだんと分かり合えてくると思う。私自身にも、お母さんから教わった文化や、エピソードを話のネタにすることで、新たな異文化を広められたら、差別が薄まるんじゃないかなと考えた。

私は、今まで外国人などの「差別」について、それほど深く、詳しく考えたことはなかったけれど、今回の人権作文がきっかけで、前よりもはるかに外国人との、上手な関わり方について深く知ることができて、よかった。

そして、今後このような悲しい「差別」が完全になくなり、人間の色々な多様性を受けいれ、お互いに尊重し合い、共に協力をして、他国どうしとの関係や社会を、大成長させていける社会を実現されることを、私は願っています。